

「父よ彼らをおゆるしてください」

詩篇 第106篇19節～23節
ルカによる福音書 第23章32節～38節

説教 村上修平牧師

主イエスは二人の犯罪人と共に十字架につけられました。着ていた服をはぎ取られ、手足を釘で打たれ、いばらの冠をかぶらされました。主イエスは神のひとり子で、何も悪いことはなさらなかったのに、むごたらしい十字架刑を耐え忍ばなければなりません。普通だったら、恨み言の一つでも言ってもよさそうなものです。実際、他の犯罪人たちは十字架の上で、神を呪い、人々を恨んで死んでいきました。しかし、主イエスが真っ先に言われたのは、意外な言葉でした。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。(ルカによる福音書23章34節)

「彼ら」とは誰のことでしょうか？ちょうどその時、ローマの兵士が主イエスの着物をくじ引きで分け合っていました。主イエスのみ苦しみを思わず、自分の利益や目先の幸せばかりに心を奪われている「彼ら」は、私たち自身の姿でもないでしょうか？そのような私たちのために、主イエスは、「彼らをおゆるしてください」と、呻きながら罪の赦しを祈って下さったのです。

また、「彼ら」の中には、ユダヤ人の祭司や律法学者、長老たちも含まれていました。彼らは、主イエスを妬み、心の中に憎しみを抱いていました。彼らは、主イエスをあざけて、「彼は他人を救った。もし彼が神のキリスト、選ばれた者であるなら、自分自身を救うがよい」(35節)と罵りました。彼らは宗教的な指導者たちで、神を熱心に信仰していたはずですが、残念なことに、神の御子を十字架に追いやるといふ愚かさを犯してしまったのです。人は、神のために正しいことをしているつもりでも、心の深いところで憎しみや妬みにとらわれていることがあります。しかし、主イエスは、彼らのためにも罪の赦しを祈られました。

主イエスはなぜ自分自身を救わなかったのでしょうか？もちろん、主イエスは全能の神として十字架から降りることもお出来になりました。けれども、主イエスはその全能の力を自分のために使われずに、私達を救い出すために使って下さったのです。大きな力を委ねられている者はそれを世の人々のために用いる責任があると思います。特に霊的指導者は、信仰の弱い人を裁いてはなりません。たとえ、責めるべきことがあっても、愛をもって忍耐強く教える必要が

あります。

さらに、「彼ら」には十字架刑を立てて見ていた民衆も含まれていました。彼らは通りすがりの見物人で、主イエスとそれ以上深く関わることを望んでいない人たちです。この日本に住む多くの人々にとって、主イエスは外国の神様に過ぎず、自分とは関わりない存在だと思われています。しかし、主イエスは、そのような私たちを愛し、十字架の上で私たちのためにも、「彼らをおゆるしてください」と、祈られたのです。

最後に、「彼ら」には、主イエスの弟子たちが含まれていました。主イエスと三年にもわたって寝食を共にしてきた仲間たちです。彼らの誰もが、最後まで主イエスに従っていきたく思っていました。しかし、主イエスが捕らえられた時、皆が主イエスを見捨てて逃げてしまったのです。彼らはおそらく自己嫌悪に陥っていたと思います。そして、主イエスは彼らのために、なおさら力を込めて、「父よ、彼らをおゆるしてください」と祈られたはずですが、私たちが主イエスを見捨てても、主イエスが私たちを見捨てることはありません。《あなたの罪はわたしがあがなった。この赦しを受け取って生きなさい》と、いつも主イエスは私達を赦しの中へと招いて下さるのです。

主の祈りの中に、『我らに罪をおかすものを我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ』という祈りがあります。私達には赦すことが難しい人々がいて、この祈りに困難を覚えることがあります。けれども、主イエスは、主人から一万タラント(約6千億円)の負債を帳消しにしてもらった僕が、自分に百デナリ(約百万円)の負債のある仲間をゆるさなかった譬えを用いて、「わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか」(マタイによる福音書18章33節)と教えて下さいました。主イエスが私達をどれほど憐れんで下さったか、その憐れみを知ったならば、私達も周りの人々をも憐れむことができるようになります。主イエスの「彼らをおゆるしてください」という祈りに今も支えられながら、私達は、毎日、罪のゆるしを祈り求めることができるのです。

(記 村上修平)